

「語りえぬものの語り」について

ウエルズ恵子

〈本プロジェクトの主旨〉

ヴァナキュラー文化研究会では、「ヴァナキュラー文化」を日常的で自然発生的な文化現象ととらえ、地方性や民族性などの枠組みよりは時代や社会の状況とかかわって形成されている集団に特徴的な文化を、研究対象としてきた。大衆文化という枠組みにもこだわらず、いわゆるハイカルチャーに対しても、その大衆的な享受のあり方との関連の中でアプローチする。本研究会ではこれまでの3年間、言語弱者の語りがどのような特質をもち現代の言語文化のあり方に何を示唆するかを追求してきた。それを「語りえないものたちの語り」という矛盾したもので言い換えてタイトル化したのは、「弱」「強」という枠組みもはずしたかったからである。しかしもちろん、「語りえない」という線引きが残ってしまう。ただ、このタイトルを使うにあたり、私たちに次のような気持ちがあった。

西欧を中心とする言語文化研究は、文献研究を中心に発展してきた。その中で、たとえばウラジーミル・プロップによる昔話の形態学は、テキストを文字記録に頼ったとはいえ混沌とした口承物語世界に独特の論理を見いだそうとし、物語の分類を試みた。しかしその根底には、文字文学の論理と口述物語とをつないで理解をはかろうという目的がある。近年の文学理論でも、口承文学は基本的に「文学」の枠外であり、それが文字文学への発展途上であるという先入観をぬぐうことができない。ジョナサン・カラーは『文学理論』で「文学は文化的エリートの活動であった」（カラー 60）と断言しているし、ポール・リクールをはじめとする物語理論も、ストーリーとは文字文学のフィクション（多くの場合、小説）であるという前提から解放されることがない。こうした文学研究理論の文脈のなかでは、口承文学の創作／享受者は前提からして「語り」の正当な場から外れた人々であり、かれらの語る内容は制限付きの語りとして理解されてきたのである。

しかし本プロジェクトでは、口承伝承や語りに関わる芸能や日常的な会話のレトリックまでを大きく「文学」ととらえ、また身体的な発話困難者と口頭の言語活動の関係も研究対象とした。そのことによって文化的エリートと非エリートの境界を、「語りえないもの」を抱えているかいないかという、常に解釈変化が可能で曖昧な境界に置きかえることができたのである。したがって私たちの立場は、「語り」を言語自律的な言語分析や文字文学理論に還元していくのではなく、語りの発生や伝承の環境、発声や音楽などを含めた文化的文脈の中で考察するというものである。環境にはもちろん各時代の政治や経済活動との関係、メディアの問題などが含まれるので、ことは複雑なのだけれども、「自らの立場を自由に説明できない状況にある者（言語弱者）」

が、語りの方法を選ぶことでなしとげた表現」に注目するという点で、テーマ性を統一させてきた。また、論理的に説明するという「語り」やプロットを入念に構成した「物語」は、人間とことばの関わりにおいてはむしろごくマイナーな部分であって、「言語表現を含めた他者への働きかけ全体が私たちに本来的な語りなのではないか」というのも私たちの見方である。

文献

Propp, Vladimir. *Morphology of the Folklore*. Trans. by Laurence Scott. Ed and rev. by Louis A. Wagner. Austin: U of Texas P, 2005.

———. *Theory and History of Folklore*. Trans. by Ariadna Y. Martin and Richard P Martin. Ed. by Anatoly Liberman. Minneapolis: U of Minnesota P, 1997.

ジョナサン・カラー『文学理論』荒木映子、富山太佳夫（訳）岩波書店 2011年

ポール・リクール『時間と物語』全三巻 久米博（訳）新曜社 1987, 1988, 1990年